

卒業論文・修士論文などにみる地域研究

この通信では前号より、センターの趣旨に沿う卒業論文、修士論文、調査報告書などの成果を社会的なものにしていくことを考え、その執筆年度を問わず、概要を紹介していくことにしました。今回は第二回目ということになります。このシリーズの基本的なねらいは、大学における研究・教育の一端を地域社会と共有していくということにあります。学内における専門領域を越えた交流の一つの方法という意味ももちろんに思われます。なお、本号では紙面の都合で20頁に掲載されている武居秀樹氏の調査報告書は、この特集に位置づけるものではありません。

LD児の親へのサポート

執筆者 杉本佳子
2004年度卒業論文
初等教育学科(障害児教育ゼミ)
指導教員 森博俊

卒論作成においては、私は、学生が障害をもつ子どもとその成長・発達をめぐる「現実」と向き合い、自分の問題意識を深め掘り直していくことを主要なねらいとしている。

この研究は、「問題や困難を抱えながらも、…:学校、社会に働きかけていく親の努力」の重要性に着目し、「親をサポートしていくことは、子どもへの支援について考えていくことにもつながる」という問題意識をもって進められた。

素朴なタイトルだが、全国的な親会の活動やそこで著された親の手記を検討する一方、地域の子どものボラ

ンタリーな活動で知り合った二人の親の聴き取り調査を通して、親の抱える困難について検討した。

論文では、年齢に応じて困難の内容が変化していくこと、困難の多くが学校との関わりで顕在化すること、周囲の理解、とりわけ教師の理解で親の悩みは変わること等が指摘された。教師を目指す彼女にとって、そのもつ意味は小さくない、よい卒業論文になったと思う。

パレスチナと民族衣装

―紛争もたらした変化

執筆者 穴田絵莉子
2004年度卒業論文
比較文化学科(欧米文化第2演習)
指導教員 分田順子

穴田さんは、卒論で、イスラエルの建国以前からパレスチナ地方に暮らし

てきた人々の民族衣装と、その変化をとりあげた。焦点は、1948年のイスラエル建国によって住処を追われた人々が、紛争を背景とした社会の混乱・解体の中で、何を脱ぎ捨て、何を新たに身にまとうようになったか、という点だった。1948年は、それまで

パレスチナ各地の風土と、各々の生業・農耕・遊牧・商業にに応じた服装をしていた人々が、初めてパレスチナ人としての意識を獲得してゆく起点の年でもあった。穴田さんは、S. Weinの研究などによりながら、1960年代までに、パレスチナ各地の地方色豊かな衣装が失われていった一方で、パレスチナ人としての一体感を求める人々が、伝統的なスタイルや意匠を部分的に取り入れた衣服を着るようになっていったとしている。

従来、社会の混乱と解体は、伝統の破壊に働く一方で、新たに台頭した政治勢力による伝統の再解釈を促すと考えられてきたが、穴田さんは、それを民族衣装の再構築という事例によって

味を考察した。

市民主体による都市河川環境問題の取り組み

―『三多摩問題研究所』の水系運動を中心に

執筆者 シュウイ 周 蔚
2004年度卒業論文
大学院 社会学地域社会研究専攻
指導教員 寺田良一(元本学教員
現在明治大学文学部教授)

執筆者の周氏は、中国からの留学生である。ひところは中国人留學生の関心といえば、もっぱら経済や経営が中心であったが、最近では環境問題をやりたいという人が多くなった。喜ぶべきかもしれないが、中国の環境問題がいつそう深刻化していることの反映かとも思う。

周氏は、都留に来る前の来日1年目を三鷹市西部で過ごした。宅地化の進行にもかかわらず、近くを流れる野川の水がきれいであったことは、彼女には新鮮な驚きであったようだ。さらに、国分寺崖線ぞいの湧水を源流とするその川が、30年ほど前には暗渠化が検

検証した結果となった。しかし、彼女の論文の最大の成果は、そこに現代世界ならではの様相を見だし、難民女性の生活を支援する国際機関やNGO・「刺繍プロジェクト」などが、民族衣装の保存や再構築に関わっているという点を明らかにしたことだろう。

穴田さんはまた、資料集めの過程で、パレスチナから来日した劇団の情報に接し、ゼミ生たちは一緒に公演を観に出かけた。それをきっかけに、ゼミに「劇場で世界と出会う」と銘打つフィールド・ワークが立ち上げられた。その術祭では、卒業生とゼミ生が再会し、世界の鼓動に直に触れる時間と空間を共有してきたことも記しておきたい。

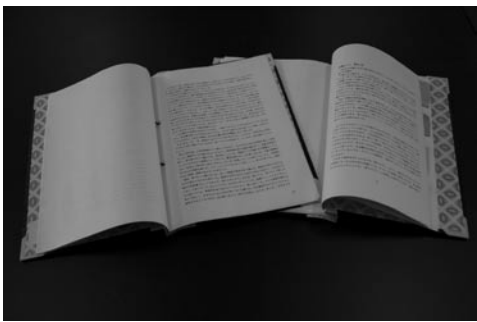
宝鉱山からみる歴史的環境保存の意義について

執筆者 生川友恒

討されるほど汚れ、都市化で水量も激減した瀕死の川であったと知ったときは、さらに驚いたようだ。瀕死の都市河川を救ったのはどのような市民の活動であったのか、興味をかき立てられた周氏は、野川の環境問題に取り組んだ「三多摩問題研究所」の後身である「ATT」(荒川、多摩川、利根川の頭文字)流域研究所」の門を叩いた。

この運動は、1970年代の野川への分水路建設や水源域でのマンション開発に対する「対決型、阻止型住民運動」に端を発する。さらにそれは、80年代に市民主体の調査研究である地下水や湧水の「水みちマップ」作りや生物調査に基づく、「雨水浸透枡」設置の提案などの対案提示運動へと発展する。この、いわゆる「市民環境科学」の台頭に、周氏は目ざとく注目する。そしてさらに、都市河川環境問題を、源流の森林問題から東京湾にいたる「水系」全体を視野に入れた現在のATT運動へと発展してきた軌跡をあとづける。短い滞在期間によくこまめに本質を見据えることができたものだと感心する。

昨年帰国した周氏は、現在上海応用技術学院で教鞭をとっている。黄河の断流*、北部の水不足、公害の激化などに悩む現代中国であるが、彼女がこ



2004年度卒業論文
社会学科(地域経済論ゼミ)
指導教員 千葉哲也

社会学科の教員、学生などで構成する地域社会学会の学生役員の中心メンバーとして在学中に活躍した生川君は、地域の人たちとも積極的に交流し、学生のまちづくり活動に道筋をつけた一人である。

卒業論文で彼が注目した宝鉱山は、明治後期に三菱合資会社により買収され、以来1970年に閉山されるまで、子会社も含めて、ほぼ70年にわたる歴史をもつ。銅、のちには硫化鉄、亜鉛などを産出し、第二次大戦中には軍需工場の指定も受けていたという。500人も収容できたという映画館や

テニスコート、小学校分校まであったというのは、三菱財閥の傘下にあったことが大きな理由だろう。現在、跡地は、「宝ネーチャーセンター」として使われているが、その栄華の跡は想像を逞しくしなければよみがえってほかない。

この論文では、1950年代の宝鉱山における労働と生活の様子や、閉山後、模索された産業遺跡としての保存や「宝ネーチャーセンター」としての再生過程を、資料のみならず当時働いていた方、保存・再生の試みに関わった方々からの聞きとりによってまとめた。また、山岳部で活躍した経験を生かし、放置されている旧鉱山施設の様子を現地に確かめてもいる。

鉱山史や地域史としては従来の資料を越えるものは示せてはいないが、都留市における近代化遺産として必ずしも正当に評価されなかったことを、他の鉱山跡地の産業遺跡としての保存運動などと対比することで明らかにし、地域に産業遺跡を残す意

を越えるものは示せてはいないが、都留市における近代化遺産として必ずしも正当に評価されなかったことを、他の鉱山跡地の産業遺跡としての保存運動などと対比することで明らかにし、地域に産業遺跡を残す意

*かつてはとうとうたる流れをたたえていた黄河が、近年、中・上流の過度な灌漑水利用、森林破壊や砂漠化により、水量が激減し、年に何ヶ月が下流部でまったく水が流れない、枯れ川になってしまう現象のこと(寺田)

うした日本の経験を中国の若い有為な人材に伝えてくれていると思うと、こちらも教員冥利に尽きる思いがする。

都留文科大学の成り立ちについて

執筆者名 三浦宏介

2002年度卒業論文

社会学科(生涯学習論ゼミ)

指導教員 畑潤

この研究は、執筆者の「どうしてここに大学があるのだろう」という問いから出発している。この問いは、都留文科大学に集う学生たちだけが抱くものであろう。すでに、30周年(4年制の都留文科大学として)記念事業として『都留文科大学記念誌』が刊行されているが(平成元年)、編集にあたられた近藤幹夫氏(都留文科大学名誉教授)は、その「あとがき」で、「5年間の短期大学の期間を入れて」「35年の間、大学発展の歴史を整理し記録に留めるという作業は一度もなされなかった」と記している。

このような状況にあつて筆者は、自らが4年間を過ごした都留文科大学の成立過程を改めて調べてみようとした

のである。筆者の探究は、全国の臨時

教員養成所の推移にも眼を向け、「谷村臨時教員養成所が、短期大学となるのは相当めずらしいケース」であった、と評しているが、その研究は、さらに短大から4年制への移行、1963年のいわゆる「学内民主化闘争」、そして1965年の「大学紛争」(都留文科大学事件)、国立移管問題と地方交付税法の改正(1973年)、へと辿られている。

それぞれの複雑な経緯について、筆者は山梨日日新聞を丹念に読むなどして、かなりの事実を明らかにし、結論部において市と大学との良いシナジー(共同)をと呼びかけている。(この卒論の一つの視点である、自治体財政と大学経営との関連に属することからは、今日切実さを帯びたテーマとして、形をかえ再浮上しているといつてよいだろう。)

さらに検証が求められる部分もあるが、「卒業論文」というものの水準を超えた、すぐれた歴史研究になっている。なお、平成16年1月に『都留文科大学創立50年記念誌』が刊行されているが、編集委員会の一人である小林成章氏(本学教員)は、その「編集後記」において、この卒業論文のことに触れている。

都留文科大学の黎明を垣間見る2冊

三浦宏介

都留文科大学の成立と発展をとらえていくことは、「地域交流」の歴史そのものを理解していくことに通じています。ここでは、卒業論文で都留文科大学史を研究し、卒業後もその探究を継続している三浦宏介氏に、2点の資料を紹介して頂いた。

*18頁に記事があります



地域と大学との関係を考えるにあたって、大学がどのように創設されたのか、黎明期に何が起きたのかを知っておくことは重要なことである。今日、大学には30年史と50年史があるが、こうした後に編纂されたものよりも、当時の雰囲気や伝えるものの方が迫るものがある。そこで2冊の本を薦めた。

都留文科大学学生会

学内民主化闘争記録編集委員会編

『都留文科大学学内民主化闘争の記録』

(富士山麓を揺るがした二十一日間) 1965・1・16

これは昭和38年に起きた、大学の事実上の最高権力者であった学部長の退陣を要求する学生たちの記録である。寄せられる全学生の90%にもおよぶ署名、連日開かれる総会、学生の声明文、学部長側の巻き返し工作など、発端か

1号館前の梅の枯れ木と若い芽

1号館前広場は、2003年の夏休みに全面的に改修されましたが、インターロッキングのスペースにある植生は、教授会のおよい意思と学生諸君の理解のもとに、ほぼ原状のまま保存されました。

みなさんは、その中央の楕円形の庭に、苔むした梅の枯れ木があり、その根元から若い芽が育ちつつあるのに気づいておられますか。あたらしい命にバトンタッチし天寿を全うしたかのような風格のある梅の枯れ木は、35年前に植えられたものようです。『都留文科大学創立五十年記念誌』には、次のようなことが記されています(都留市広報



昭和45年7月15日付からの転載)。「都留文科大学では環境の整備をと、四月のはじめから篠原教授の指導のもとに事務職員と一部学生の奉仕で、玄関前と、雑草の生い繁っていた裏庭を整理して、庭園をつくりました。玄関前には梅の大きを主に岩を組み芝生を植えて訪れる人の目を引いています。」

この梅の若木は、現在ピオトープ委員会が丁寧に見守っています。

*なおこの事実については、森江晃三氏、長鐵翁氏(両氏ともに都留文科大学名誉教授)に問い合せたところ、両氏ともに「ほぼ間違いなし」と回答されました。【編集部】

ら学部長の退陣まで、21日間の闘争はスリリングである。「学生運動」という言葉はよく聞かれますが、要求が達成されるまでの経緯がわかるものは珍しい。この闘争以降、大学は紆余曲折を経て大学らしくなっていく。

『小田和金貞先生追悼録』

1970・10・10

前に取り上げた「学部長」とは小田和金貞そのひとである。これは小田和氏の死後3年目に、知人らによって編纂された追悼録である。闘争の記録では大学の「独裁者」として悪役ではあるが、追悼録に見られるような小田和氏の信念なくしては、地域から要望があったとしても、人口3万人余りの都留市に公立大学を創設するのは不可能だったのではないだろうか。もちろん、臨時教員養成所時代から大学

創設に尽力したゆえの権力集中化が民主化闘争を引き起こしたわけではあるが、黎明期に輝く一人物への興味は尽きない。

ちなみに、小田和氏は大学から去った後、県立図書館長を務めながら、県立女子短期大学(現、県立大学)の創設に尽力している。彼は資産家の家に生まれたわけでもなく、生涯に2つの公立大学を創設させた。そういう人物は他にいるだろうか。

時を越えて出会う背反する2冊。学生たちの民主化への情熱と大学創設の信念を貫いた人生。立場は違えど、それぞれ大学を想う気持ちに胸熱くする。

いずれも大学図書館に所蔵されているので、是非ご一読いただきたい。

(みうら) こうすけ・本学社会学科卒業生

『真鶴町のまちづくり条例とその実態』(2004年11月発行)
『早川町政・実態調査報告書』(2004年12月発行)

二つの調査を終えて

武居秀樹

昨年度にゼミナールで、神奈川県真鶴町と山梨県の早川町に調査にかけた。

8月に行った人口9000人の真鶴町は、有名な町づくり条例(Ⅱ「美の条例」)の実態を調査することが目的であった。都市計画担当者、町会議員、住民にインタビューを行ったり、町を

散策した。多角的な調査を通じて、「美の条例」が真鶴の歴史と伝統に根ざしたものであること、しかし、条例の眼目であった住民参加がまったく進んでいないこと、を知ることができた。散策してみた真夏の真鶴は美しかった。自然と町並みが溶け合い、海に面して急勾配に広がっており、夏陽に照

らされ輝く様には、フランスのニースを思わせる港町独特の美しさがあった。これだけの町並みを残しているということは、強固なコミュニティの存在を抜きにはありえない。そうであつてもなお、住民参加を実態としてすすめていくことは難しいのだ。昨年9月と今年2月の2度、中山間

気応援事業」(コミュニティビジネス)への多くの住民の参加を得るなど、採算がとれず民間業者が参入しない(Ⅱ「民営化の論理の通じない」)世界で、町役場は住民と協力しながら賢明に高齢者福祉に取り組んでいた。多くの難題を抱える人口1800人ほどの町であるが、そこには住民とともに難題を解決していこうとする住民自治の原点があつた。

「早川町なんて合併するしかないよ」と軽口をたたいていた学生が、調査を終えると口を閉じた。彼の額に皺を寄せて考える姿をみて、「この調査は成功した」と直感した。そして今年、3年になった彼らと早川町の全戸を対象としたアンケートと面接の調査に挑もうとしている。

(たけい ひでき・本学社会科学科教員)



当面合併しない道を選択した早川町に出かけた。町長や財政担当にインタビューし、シンクタンクⅡ上流文化圏研究所、福祉センターを調査した。財政状態からいって高齢化率48%のこの町が生き残っていないのだろうか、そんな疑問を抱きながらの調査だった。

地域に出ていく学生の姿を伝える

『地域へ出ていくガイドブック2005』の編集と大学での授業

佐藤菜穂子

私たちが作製した『都留文科大学生のためのMotto!地域に出て行くガイドブック』(以下ガイドブック)は、都留をフィールドにさまざまな分野で活動する学生たちの姿を写真と文でまとめた本です。ガイドブックという名

という目的がありました。なぜなら多くの学生は全国各地から集まってくるわけで、この地域に対する馴染みがほとんどないからです。せっかくこのまちで大学生活をおくるのだから、このまちを「田舎だ、何もない」と悲観するのではなく、少しでも楽しく過ごしていってほしい、そんな思いが私たちにあるのです。

先日(5月24日)は、本学社会科学科1年生の必修科目である「現代社会の課題」の時間に、「ガイドブックの読

み方」と題した授業も行ないました。そのなかで、よりこのガイドブックを身近に感じてもらえるようにと、実際にまちに出て活動する「work-waku都留(わくわくする)」。*の岩倉里珠さん(社会科学科3年)・藤田雄さん(初等教育学科3年)に、また「Revo(レボ)」の村上杏菜さん(国文学科3年)・神田成美さん(国文学科3年)に発表

をしてもらい、大変好評をいただきました。その後、「work-waku都留」から、「あの授業を聞いてメンバーになってくれた学生がいました」との報告を受け、大変うれしく思いました。

今後、広く学内や地域でガイドブックの配布を行い、新入生だけでなくもつと多くの方にこのガイドブックの存在や、ガイドブックに載っている団体の活動を知ってもらえたら、と思っています。

なお、中村伸也さん(社会科学科4年)

を中心にして、昨年度に引き続き、「都留魅力発見ツアー」が二回企画・実行されました(4月17日、5月28日)。

(なとう なおこ・社会科学科4年)

*「work-waku都留」の活動については、自治体問題研究所編『住民と自治』2005年7月号でも、その実践報告が掲載されています。



都留とリサイクルと私

矢ヶ崎 奈美

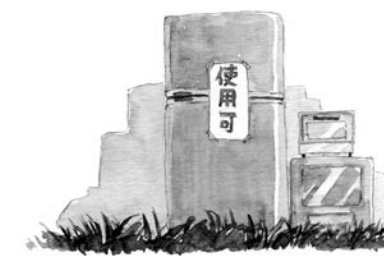


「学生リサイクル推進グループ」は、都留文科大学生が出すゴミの諸問題解決と啓蒙のために2000年度から組織された学生団体です。

主な活動内容として、卒業生の引越しが多くなる3月に大学駐車場をお借りして、そこに臨時のゴミステーションを設置し、引越しゴミを回収したり、まだ使えるものを引き取って、在学生や新入生に無料で引き渡しているのです。4月にも活動を行って引越しが多くなる3月に大学駐車場をお借りして、そこに臨時のゴミステーションを設置し、引越しゴミを回収したり、まだ使えるものを引き取って、在学生や新入生に無料で引き渡しているのです。4月にも活動を行って引越しが多くなる3月に大学駐車場をお借りして、そこに臨時のゴミステーションを設置し、引越しゴミを回収したり、まだ使えるものを引き取って、在学生や新入生に無料で引き渡しているのです。4月にも活動を行って

私が初めて参加したのは2002年度でした。当時の代表と面識があり、たまたま駐車場近くを歩いていたら引き込まれた：というのが事の発端です。

この活動にも3年間関わっているのですが、とくに「都留の環境のため」とよく意識して行っていたことはありません。私がこの活動をつづけて



(やがさき なみ・本学社会学科4年)

以前は、卒業の時期になると、街中のゴミ集積所(とくに上谷地区)に、学生たちが置いていくいろいろなゴミがあふれ、醜い状況になっていました。しかし2001年に、一人の学生(生川友恒さん・社会学科)の提案があり、それに市・大学・学生・業者(「フアイブ・スリー」)が協力をして、はじめてのリサイクル活動が実現しました。

当初は、テレビ、洗濯機、冷蔵庫、エアコンを対象とする家電リサイクル法(2001年4月施行)もまだなく、これらのものもすべてを無料で引き取っていただけで、学生だけでなく、一般の方が粗大ゴミ・家電などを持ち込むというものがかなりありました。それに、学生たちが持つてきてくれたリサイクル品を、市民が自動車などで会場に来て持ち帰ろうとし、断ることに苦労することもありました。しかし今では、そのようなことはほとんど無いです。

リサイクル活動を始めて今年で5年目になりますが、リサイクル品の持ち込み数は年々減ってきているような気がします。学生の間にはリサイクルの意識が浸透してきたようで、使用できるものは会場に持ち込みはせずに後輩たちに直接渡しているように思われま

す。反面、使用できないもの(ベッド・家具・家電製品・寝具・衣類など)が大量に持ち込まれ、これらの解体作業に追われる時間が多くなってきています。

リサイクル品のなかで人気があるのはカラーボックスで、持ち込まれるとたんに欲しい人が出てきます。自転車も人気があります。最近では、新入生の方々にもリサイクル活動のことが知られてきているようで、生活用品のほとんどをリサイクル品で買う人もいます。

この活動を行なう時期(3月中旬から4月中旬まで)は天候が不安定で、雨や雪の日、突風に見まわれる日もあり、リサイクルできる物品が濡れたり破損してしまうこともあります。それで、できれば天候に左右されない場所が欲しいです。

今後、「リサイクルの輪」が広がりますように。

(たなか けいお・有限会社「フアイブ・スリー」)



T O P I C S

リサイクル活動の協力者として思うこと

田中 治夫





T O P I C S
若い人にもっと
農業を知ってもらおう
清水政雄



生きていくうえでなくてはならない食糧というものが、とくに日本人は毎日お米を食べていますし、野菜にしても必要不可欠なものです。だから若い人たちにもっと農業を知ってもらおう、そう思います。しかし他方、これら農産物を作る農地が、農業をとりまく環境変化により年々遊休化してきているという現状があります。

若い人たちに農業を理解してもらおうという思いと、増大する遊休農地の解消を試みていきたいという願いを重ね、〈お米作りの交流会〉を企画いたしました。

とくに都留市には、すばらしい都留文科大学がありますが、この学生たちがやがて先生となり、子どもたちに教える立場になったとき、少しでも農業のことを話せればと思います、農業委員会として取り組むことといたしました。

田植えの日には25名近い学生が参加し、田んぼの整地から苗植えの準備まで学生たちが行いました。そのときの泥だらけになって作業をしている姿は、本当に楽しそうでした。

続いてわれわれが苗の植え方を指導して、さあ本番です。横一列になって学生が一人ひとり植えていきます。最初はぎこちない植え方でも、やがて上手に植えるようになっていきました。



隣の分まで頑張って植えてくれる人もあり、これが助け合う精神だ”などと言いつつ和気あいあいのうちに田植えは終了いたしました。私たち農業委員会のメンバーにとっても、若い人たちと共同作業ができて楽しい一日でした。学生さんたちは田植えは初めてということなので、勉強になったと思います。来年は、きつと田植えの指導者ですね。

田植えのあとは、田んぼの草取りがあります。除草剤は使用せず無農薬という方針で、みんなで田んぼに入っで手で草を取り除きましょう。

秋の取入れを楽しみに、みんなで頑張ります。

〔しみず まさお・都留市農業委員会会長
山梨日日新聞(2005.6.9)の「風林火山」のコラムで清水政雄氏が紹介されました。【編集部】〕

たんぼクラブ始動!

今年の春先から「たんぼクラブ」という名称で稲作を試みています。都留市の産業観光課と農業委員会からお誘いがあり、遊休農地の活用と大学生の農業体験学習をつなぐ趣旨に賛同し、地域交流研究センターの事業として受けする方向で検討しましたが、今年については試行的に、農業委員会が中心となり、学生や教員が任意参加するという体制で臨むことになりました。南都留農業改良普及センターの精力的なご指導も得ています。5月2日の播種、6月4日の田植えと第一段階が終了しました。参加した学生たちは、確かな「手応え」を感じ始めているようです。

(西本勝美・本学初等教育学科教員)



T O P I C S
大学生の米づくり
杉本 清

私が、〈大学生と地域住民とが共同し、こだわりの農業を行いたい〉という計画を心に抱いたのは、3年前のことです。その後紆余曲折がありました。まず農地は、市が個人から農地を借り入れ大学生に貸しつけるといふ、特定農地貸付規程を整備することにやり、借り入れることとしました。

この計画の一番の危機は、今年の3月末にありました。大学の先生方との話し合いの場で、「地域交流研究センター」としては、学内でこの事業がまだ認知されておらず、大学としても米づくりは初めてであり、予算も無いので今回は見合わせたい」との見解が示されたのです。

この協議の場には、農業委員会の会長も加わっていたので、先生方の見解を聞いた会長は、「この事業を今年度の農業委員会の活動事業に取り入れて行く。米づくりの段取り、指導は農業委員会が全面的に応援するので実施したらどうか」と発言されました。こういうことで、ようやく実現する運びになりました。大学の先生方、地主の滝本光清さん、市の農業委員の方々、県の南都留農

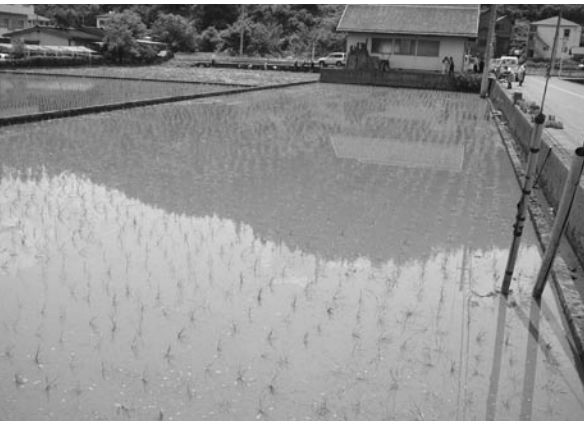
業改良普及センター職員、苗作りから田植えにいたるまですべてを段取りしていただいた、産業観光課農林振興担当リーダーの清水一夫さん等に、お礼を申し上げます。

早朝や通勤途中での水見で多くの人たちと会話する機会が生まれています。地域住民も関心をもって見守ってくれているようです。大学生が自分で植えた田んぼを観察しに来ている姿を見ると、思わず顔が微笑み、声をかけたくくなります。

ところで先日、通勤途中に水見をしていると、70歳前後の女性が私に声をかけ、「大学生のクラブが行なっているのですか、私は今まで田植えをしたことがないので遠くでうらやましく見ていました、一度体験したい」と話されました。これからこの稲作の活動が発展し、大学生主体で、地域住民や都会の小学生等を対象にした活動ができるようになればよいなあと考えています。

収穫まで5ヶ月。まだまだたくさん作業がありますが、たくさんのおいしく汗をかきましょう。

(すぎもと きよし・都留市役所産業建設部産業観光課・農業委員会事務局)



T O P I C S

初めての田植え

雨宮香織

私は実家から大学まで車で通っています。大学に近づくにつれて田んぼが多くなっていきます。去年の5月に道の途中の田んぼで、おじいちゃんが一人で田植えをしているのを見ました。私はとても風情があり、すばらしい光景だと思いました。そのときから、私は田植えをしたことが無かったこともあり、一度でいいから田植えをしたいと思うようになりました。稲がどのように育つか、実際に見て触れて知っていききたいという気持ちがありました。大学の「たんぼクラブ」で稲を育てる企画があるので絶対に参加しようと思い、クラブの活動に積極的に参加するようになりました。

種は、5月の初めに私たちの手でまいたのですが、それから、芽がでて田植えが出来るような大きさにまで育つたのを見たときは、嬉しい気持ちになりました。田植えの日に、初めて田んぼの中に入りました。最初は田んぼに入るのにちゅうちよしたり、日焼けしそうで嫌だな、虫はいないかな：などと考えていました。けれど田植えが始まってしまおうと、みんなで話ながらの作業が楽しくてあっという間に終わってしまいました。

稲は植えるというより田んぼに置いていくという感じで、意外でした。田

んぼの泥の感じなども、実際に触れてみなければ分からなかったことです。さらに手でまっすぐに植える難しさや共同作業の楽しさなどは、本で読んでも得られないことでした。

「たんぼクラブ」の活動を通じて一番大切だと思ったこと、それは小さな疑問や興味を大切にすることです。疑問や興味を大切にすることによって、さまざまなことを知る機会が増えます。

私は将来、小学校の教師になりたいと考えています。教師になれたときに、子どもたちの疑問や興味を实践を通して大切にしてあげられる教師になりたいです。そのためにも、子どもたちの疑問や興味を壊さずにカバーしてあげられる位の、私自身の経験が必要だと思いました。

(あまみや かおり・初等教育学科3年)

5月2日の播種については山梨日日新聞(6月3日)が、また6月4日の田植えについてはテレビ山梨、山梨日日新聞(6月5日)が報じました。【編集部】

田植えの当日は、「松花軒」(パン屋さん)と農協から、それぞれパンと飲み物の差し入れがありました。田植え終了後に、みんなで味わいました。(たんぼクラブ)



T O P I C S 稲作の人は、じまの交流地

志茂龍太



私は今回「たんぼクラブ」に参加し、種蒔きから田植えまでを体験しました。初めてのなので、右も左も分かりませんでした。最初は、農業委員や農業改良普及センターの方々が熱心に分かりやすく指導してくださり、楽しみながらやる事ができました。支援してくださっている方々は、人間的にも温かく、人情を感じます。

5月2日に、育苗箱に土を入れ、種を蒔き、土を被せ、水を撒くという一連の作業を終え、それを育苗ハウスに移しました。6月に入り、苗が生育したので、田植えをしました(6月4日)。当日は、トラクターと私たちの人力で田を平らにし、裸足になって(軍足をはきましたが)、苗を丁寧に手植えしていきました。はじめは水が臭くて田に入るのが嫌でしたが、一旦入ると慣れてしまい、楽しみながら植えている自分がいました。

そして集合時間から2時間も経つころには、一面手作りの無骨な田んぼが出来上がりました。私は、整っているとは言い難い歪な手作り感あふれるオリジナルな田んぼが、たいへん気に入りました。満足感と同時に、自然を感じました。大学の講義では経験できない、えも言われぬ充足感でした。学生たちも支援して下さった方々も、一



様に笑顔で、自然とお互いの労を称えあっていました。

しかし、これから秋にかけて、雑草を抜くことや、その他の手入れが怠れません。実りの収穫を迎え喜びを分かち合うためにも、協力してやらなければなりません。米だけに、みんながまともならなければ上手く(美味く)いきません。学年や学科や地域を越えた交流をし、あらたな協力関係を生み出すのも、「たんぼクラブ」の一つの機能だと感じます。

稲穂のように頭を垂れる謙虚な人たちの集まりの「たんぼクラブ」、大好きです。

(しも りゅうた・社会学科2年)

都留での援農

出倉裕一

私が都留で農作業のお手伝いをする

ようになったのは、大学2年生の頃からでした。先輩に誘われて畑へ行き、ミニトマトの収穫を手伝ったことが最初でした。以来、大学院に入学した現在もお手伝いは続いています。お金はもらっていません。あくまで自発的に行うことが前提になっているのです。ただし、収穫できる作物は自由にも

らっています。

とくに夏野菜が実る頃は、お店へ買い物に行くことが少なくなり、野菜のほとんどを畑からもらっていただくためです。このように自分も育ててきた野菜を自分で収穫し調理して食べる日々が続くと、気持ちが愉快になってきます。お金はもらわなくても、食費に使うお金は浮いてくる。それでい



て、有機で育てた野菜はおいしく、あとは調理する自分の腕次第。こうした過程を私は楽しく感じるので、私自身は農作業に抵抗を感じることはありませんでした。実家が兼業農家であるため、

幼い頃から親の手伝いをしてきた経験があったからです。今に至って、農作業のお手伝いを続けてきた理由を挙げると、自分も育てた野菜を食する楽しみ、それに都留での生活がとても身近に感じられることが大きかったと考えます。

私の学生生活の日常の大半は、勉学や部活、アルバイトなどで占められてきました。そのなかで、空いた時間を畑や田んぼでの作業に費やしていると、いろいろな関わりがみえてくるのです。農作業を教えてくれる地域の方やともに手伝う学生仲間との会話の中に感じるつながり、植えた作物が育つ土台となる自然環境への関心、自然と目が行くまわりの景観など、それらを情報として捉えるなら、様々な形で自分に伝わってきます。

私は、都留での学生生活において



こうした経験ができることは、自己教育の一種なのかなと思うことがありますが、体験を通じた学びという点で、農作業のお手伝いはとても意義があると考えられます。

(てくら ゆういち 本学大学院社会学地域社会研究専攻)

読者の感想

以下の「読者の感想」は、編集部メンバーへの私信として書かれたものです。ご本人の了解を得、私的な部分を略して紹介します。

都留文科大『地域交流センター通信』ご送付いただき、ありがとうございます。

昨日、Vois6&7が着きました。これらを拝見して、「都留文」が公立大らしく足場の地域との繋がり・交流をしっかりと位置づけ、これに力を入れていることが分かり、これまでの教師生活の大部分を二つの公立大で過ごしてきた者としてある種の感慨が湧いてきました。

とくに第7号の「特集1 学生・留學生たちの居住生活」は懐かしさもあり大いに楽しみましたし、同じ号の「特集2 卒業論文・修士論文にみる地域研究」での各卒論・修論の紹介は学生を大事にしている皆さんの息遣いが伝わってくるようでした。

第6号の「フィールド・ミュージアム」に因んで言えば、現在奉職し

ている龍谷大学の瀬田学舎に同じような森があり（おそらくそちらのものよりもっと大規模なもので自己所有地の一部となっており、オオタカの営巣などが見られるため大学が位置づけて保全に努めている）、この森をフィールドの中核として内外の研究者を集めて大掛かりな里山研究（自然科学と人文・社会科学の共同研究）が昨年度からスタートしており、今年から私も研究メンバーにさせてもらいました。興味があれば、<http://satoyama-arc.yukoku.ac.jp/link.html>をご覧ください。（池田恒男氏・龍谷大学教授）

センター通信7号の感想

先日は、「地域交流センター通信」を送っていただき、ありがとうございます。大学を卒業して6年。こういった形で今の大学の様子を知ることができると、本当にうれしいことです。「地域に根ざした大学」が、ことばだけでなく実践されている…すばらしいことだと思えます。

トピックスで紹介されていた山口県

立大学の石川先生の寄稿文のなかに出ていたことばに、先生が求められていた、生活綴方や「山びこ学校」のような学びを思い出しました。産・官・学の連携と言われると、とかく生産性に直接つながる「産」の部分が中心になりがちですが、都留では地・学・官が一体となって、知や心の成長が動いているのです。

今回、下宿に関する記事がありました。私も懐かしう読ませていただきました。私も学生時代、大家さんに



は大変お世話になりました。大学手前のTというアパートなのですが、入学金・卒業式には赤飯を炊いてくれたり、家賃を払いに行く（東京ではありえない！）と、ごはんをご馳走してくれたり、給湯器が壊れた冬には一週間お風呂を貸して下さったり…、いろいろと思いつきました。今でも大学の情報を伝えてくれますよ、大学前に富士急行の駅ができたとか、あたらしく付属図書館ができたとか。

その図書館に、ピオトープがあるんですね。都留（文大）らしいですね。今泉（吉晴）先生のこやかなお顔が目につかびました。そして、やっぱり、行ってみたいなあー、というのが本心です。

それから、堀尾（輝久）先生が講演されたのです。私も、東京で一度だけお話を聞いたことがあります。卒論で先生の本を読み、どんな方なんだろうという想いがあり、出かけてみました。お話は、まさに「負うた子に教えられ浅瀬を渡る」だったので、私の想像では「のんびりなおじいちゃん先生」だったのが、ものすごくキリッとしていたのが印象に残っています。（…中略…）次の通信も、また楽しみにしています。（奥山和子氏・本学卒業生）

新カリキュラム 「地域交流研究」が はじまる

四月からの新しいカリキュラムに、地域交流研究センターの教員が担当する「地域交流研究Ⅰ～Ⅳ」（教養科目）という新科目が開設されました。この科目は、地域の自然や人々の暮らしと文化、あるいは人間の成長・発達をめぐる問題などに着目し、地域に固有のさまざまな価値を学生諸君とともに実地にさぐるものとするものです。

本年度は、そのⅠ（今泉吉晴・特別非常勤講師）とⅡ（畑潤・本学教員）を開講していますが、専門領域を超えて、合同して地域の自然や人々との交流を経験していこうとしています。受講生は実質総計22名ですが、毎回のレポートには「この地域交流研究の授業は本当に楽しいし、自分の人生に良い影響を与えてくれそうな気がします。これからの授業がとて楽しみます。」といったような、生き生きとした感想があふれています。

とくに何かの専門科学を「教える・指導する」ということではなく、交流経験そのものがもつ意味をそれぞれに感

じ取っていこうとしています。受講生のなかからは、「わたしは森を守りたいと思います。この授業や大学で森の管理をするという計画が実現するなら、ぜひ参加したいです。」といったような新たな意欲も生まれています。なおこの合同授業は、地域交流研究センターの北垣憲仁氏（特別非常勤講師）の支援を得て進めています。



Yonemoto Shigenobu
地域交流研究と私

私のこの講座に対する最初の印象は、授業を間違えてしまったかなというものでした。周りは初等教育学科や社会学科の先輩たちばかり、授業の内容も、自然とのふれあいをテーマに、教室を飛びだして自ら体験していくものでした。入学してこの数日間受けてきたどの授業とも全く違い、国文学科の自分が受講できる授業なのか不安になりました。けれども、その不安は知ることの楽しさ、自然の不思議さ、これからの授業への新たな期待によって消え去りました。今では毎回の授業でどんな新しいことが学べるのか、それが楽しみでしかたありません。

私たちの第一回目の授業は町にでて自分たちで都留の身近な自然の不思議に出会うことでした。富士山の噴火の際、流れ出た溶岩によってできた水の道に始まり、道端に生える草木の名前

まで今までわかっていなかったようで、実際は何もわかってはいなかったということとを学びました。

二回目の授業は学校の裏手にある山に散策に出掛けました。現在の私たちは山に登ると聞くと一体何をしに行くの？といった感じで何かとても特別なことのように考えがちです。しかし、何十年前の私たちの生活は山の植物や自然によって成り立っていました。私たちの生活とともに自然も移りかわってきたということを、段々になつた山の斜面や杉林の中に一本だけたつ梅の木に学びました。

こうやって私たちの授業は、直接目で見て、触れてという経験を積み重ねてきていくものです。木を自分たちで切ることに、木のもつ本来の香り・質感を身をもって体験し、山に生える草木を手にとり、香りを嗅ぐことでその草の特徴を覚える。このように、一つの発見がまた新たな発見につながっていくことに、この授業の楽しさがあると私は思います。

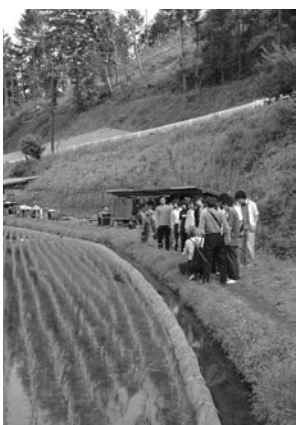
これからも、この授業で得た発見を新たな形で次につないでいけるように、日々探究心を働かせ、地域交流研究に参加していきたいです。

（たまき きよの・国文学科1年）

「地域交流研究」Ⅰ・Ⅱの感想より

「富士山からきている湧き水！これには感動しました。…誰かが飲みはじめたらだんだん私も飲みたくなってきて、わくわくしながら飲みました。すごくおいしかったです。昔に戻ったような気分でした。」（初等教育学科2年）

「湧き水を見られる場所に着いた。岩の隙間から流れ出る水の多さに驚いたが、地元の話では、昔に比べて少なくなったらしい。家の戸は開けっ放しになっており、開放的だ。交流が簡単にできてしまう、すばらしい環境でもあった。文献では手に入り得ない、口調、言葉遣いによって自分のなかに入ってくる生の意見は、どれだけ素晴らしいことか分かった。」（社会学科2年）



「先週の裏山の観察は、とても有意義なものであった。大学から5分ぐらいでいけるところにあのような自然があふれているとは想像できなかった。…実際に入ってみるとたくさん草や木、花が生息していて感動の連続であった。…大木が自然の力によって倒れるということが容易にあることを知って驚いた。倒れかかっている木の様はとても迫力があって、自然の力に圧倒された。」（比較文化学科2年）

「裏山のあちこちはもともと畑だった



らしく、登るたびにところどころ平地が広がっていた。それはずっと山奥まで続いており、昔の人はこんな山奥まで来て畑を耕していたのかと思うと頭が下がった。」（比較文化学科1年）



「…木の皮が簡単に剥けてしまうこと、乾いた皮の中があんなに潤っていること、中からつよい香りを放っていること、内側と外側の色がまったく違うことなど、初めて知ることばかりでした。また、外側の皮のその内側の方が薄く何層にも重なっていること、枝の断面を見ると、ものすごい力がかけられたようにきつく堅く中が詰まっていることなどが分かりました。その堅さは、実際に鋸で切ってみたときにも、腕にかかる力から感じることができました。」（比較文化学科1年）



「…国道を渡り少し小道を歩いたところで、たくさんユキノシタに出会いました。ユキノシタの花は、上側に小さな花びらが三つあり、下側に花びらが二つある、とってもおしゃれな花でした。…少し進むと、用水路のところには大きなマスの姿が見えました。ぼくは、マスがこんなところにも住んでいるんだと、感激で胸がドキドキしました。」（初等教育学科1年）

●編集後記

○「地域」というものを、「そこで生きようとするすべての人に開かれた再生のスペース」にしていこうという分田順子氏のメッセージ（巻頭文）は、自然の生命と人間の生きる格闘とを貫く思想として、私たちに「地域」に対する親しみと注意力を呼びさましてくれそうです。

○今泉吉晴氏は『甲斐国志』を手がかりに、「上郷という地域認識は、今を生きる私たちに、歴史のある小さな自治体には、そのくらしをささえる豊かな自然の基盤がある、という大切な事実を思い起こさせる」と着想しています。特集「自然とともに働いた歴史に学ぶ」は、自然と人びとの交流を大きくつかみなおしていく画期となるもので、これからさまざまな実践的課題があらたに見出されていくことになるでしょう。

○稲作づくりの実践が始まり、多くの人びとの交流を生んでいます。地域交流研究センターの存在は、こういう実践を可能にもするわけです。

○地域交流研究センターが担う新カリキュラム「地域交流研究」がスタートしました。その中間報告が記事として掲載されていますが、大学教育に新生面を開いています。

○都留文科大学の成り立ちとその歴史は、〈都留市と大学〉、〈都留市・大学と全国各地〉という二つの交流の面をもっており、その双方が、地域交流研究の価値あるテーマになるように思われます。

○読者から、「地域に関わりなく〈読みたくなる通信〉は、そうざらにはありません」「心配りのきいた誌面づくり、成瀬洋平という人の絵、そして写真、〈地域〉からのメッセージがあって、都留を知らない人でも魅きつけられるものあり」、といった感想が寄せられています。

○次号は、「地域の仕事人から学ぶ」を特集する予定です。

（編集長・畑潤）

絵・成瀬洋平（本学大学院文学研究科比較文化専攻1年）p7,21,22,23,32 工藤真純（本学初等教育学科研究生）p13

